

## お正月の中央図書館で新春かるた会 見事 中学生が優勝！



お正月の行事のなかでも、とくに日本の伝統をつたえるものに『小倉百人一首』によるカルタ取りがあります。さらに『かつしか郷土かるた』も加えて1月3日、初の【かるた会】が友の会主催の新年イベントとしてにぎやかに、そして楽しく開かれました。

大会はこのイベントを企画した実行委員長の高橋副会長の司会で行われ、開催のために応援して頂いた橋本中央図書館館長の挨拶を受けて午後1時から開かれました。



かつしか郷土かるた

まず江戸時代中期に誕生した『江戸いろはかるた』を図書館の打越係長が読み手となってスタート。「花より団子」という句と絵札の絵とのちがひ、旧かなづかいの“あ”などで混乱して大笑い的一幕。次に区内の小・中学生なども参加して作られた『かつしか郷土かるた』を使っただけの取りあひ。鶴岡副会長が読み手になってゲーム開始、さすがに学校で体験している小・中学生を連れた親子の参加者が圧倒的に優勢でした。このかるたは中央図書館でも販売されていますが、美しい<切り絵>の絵札が評判です。

メインの『小倉百人一首』はチーム分けしたのちくちらし取りで開始、一段落したところでさらに名人戦で行われている<源平合戦>を専用CDの読み上げで行ないました。最後に勝ち残った小・中学生の2名のお嬢さんに大人が2名参加の4人で決戦の結果、中学生のお嬢さんが見事優勝。聞けば最近の区内学校では百人一首は必修科目とか。思わず参加した大人たちも「ウームなるほど」と感嘆。記憶力の低下ばかりではないと安心した様子でした。



告知期間が20日間あまりしかなく、実行委員会を立ち上げてすぐポスターを制作、さあどうなることかと案じられましたが、図書館の応援と賞品の提供を受けて楽しく開催することができました。参加者は老若男女と、実行委員会メンバー、図書館のみなさんを含めて30名ほどでしたが、来年はもっと告知に力を入れてこの行事を継続してほしいという声とともに楽しい大会の幕が閉じられました。

## 第6回「葛飾図書館友の会」総会開催のお知らせ

「友の会」はこの4月で6年目の活動に入ります。これまで8委員会ですさまざまなイベント・講演会・見学会をはじめ、映画や音楽会、お話会の開催、広報紙の発行などを行ってきました。下記の日程で第6回総会を開催します。図書館に係るボランティアやアイデア実現のために一緒に活動していきませんか。皆様の参加と「友の会」への加入をお待ちしています。参加は自由です。詳細が決定次第、ポスターやチラシ、ホームページなどでご案内します。

日時 平成25年4月27日(土) 午後2時から

場所 葛飾区立中央図書館 会議室1 (葛飾区金町6-2-1 ヴィナシス金町3階)

# 葛飾図書館友の会 第3回 見学会

印刷の  
歴史を  
探る！

## 印刷技術の進化を体感

印刷の  
未来を  
展示！

イベント委員会主催の友の会見学会は、第1回の「アド・ミュージアム東京(広告博物館)」、第2回「日比谷図書文化館」に続いて、今回は新聞、書籍、ポスターなどの印刷物・印刷技術の歴史と現在、そして未来の姿を展示する文京区の『印刷博物館』を訪れました。

この博物館はJR飯田橋駅から約13分というなかなかの距離で、このような機会がないと、めったに足を運ぶことがないと思われる施設ですが、内容は大変充実していてさすが日本有数の印刷企業<トッパン>のメセナ活動だという感じがしました。昨年12月1日、今回も朝野会長をはじめ友の会会員13名が参加し、専門家の説明を受けたのち午後1時から3時までの2時間、熱心に見学しました。

博物館は4つの「展示ゾーン」に分かれていて、**第1**が《かんじる(感覚)－プロログ展示ゾーン》。高さ7メートル、長さ40メートルの巨大な壁面に人類が作り上げてきたメディアの数々とその行為がさまざまな資料のレプリカ(一部は実物)によって展示され、洞窟壁画や活字・印刷機の誕生、そしてエレクトロニクスまでに至る印刷技術の進歩・発展が一覧されています。

**第2**の《見つける(発見)－展示ゾーン》では『印刷都市東京と近代日本』展(1月14日終了)が開催されており、日本の近代化に大きくかかわってきた東京一の幕末維新(1860～1890)を中心に激動の政治・経済・社会・文化を映す浮世絵から木版、活版などの印刷技術、表現技術の変遷が約130点の資料によって展示され、先人の努力に感銘を受けました。

**第3**の《わかる(理解)－展示ゾーン》では『World Book Design(世界のブックデザイン)』展(2月24日終了)が行われており、**第4**の《つくる(創造)》－印刷工房では実際に活版印刷の技術(植字・製版・印刷)が体験できる教室もあり、会員はスタンプ式の印刷機で、カレンダーを作っていました。

見学会の圧巻は、別施設のカーブ型巨大スクリーン<VRシアター>に映写される、VR(バーチャルリアリティ)技術で制作された唐招提寺の障壁画(東山魁夷作)でした。縦、横、空中を自在に飛び回る仮想現実を映すコンピューターの技術も印刷技術の進化の表れだと説明され、ただただ驚くばかりの一日でした。



## 友の会活動 今後のラインナップ (いずれも中央図書館・無料)

- イベント委員会** 3月10日(日) 午後2時から4時 会議室1(手話通訳あり)  
トークライブ・スペシャル 「本屋はこんなにおもしろい」  
～電子書籍の時代における書店の役割、そして図書館は?～  
講師 石橋毅史(いしばし たけふみ)氏 (ノンフィクション作家)
- 広報委員会** 3月12日(火) 午後6時半から キーワード読書会 会議室2 キーワードは「めざめ」
- ナイトシアター委員会** 3月9日(土) 午後6時から 会議室1 「美女と野獣」上映
- 児童・YA サービス応援委員会** 3月2日(土) 午後3時半から「おはなし会」 おはなしのへや
- CD・DVDコンサート委員会** 3月31日(日) 午後2時から 会議室1 「旅立ち」の名曲特集

# 新製品開発の思考法

当会の活動ではこれまで手薄だったビジネスパーソンの方を対象にした読書会を昨年12月6、13、20日の全3回で実施しました。今回取り上げた本は朝野熙彦と山中正彦の共著による「新製品開発」(朝倉書店)という本で、味の素で食品開発部長をしていた山中先生が提案された「基盤マーケティング・リレーション(Basic Marketing Relations:BMR)」という概念フレームを勉強しました。山中先生は同社のマーケティング研修用社内資料を作成した責任者で、長年にわたって同社の食品開発をリードしてきた方です。もちろんBMRを知っているだけで新製品が生まれるわけではありませんが、プランナーがジャストアイデアだけで独走して、マーケティングで重要な問題を見逃さないようにするためのチェックリストとして使えます。思考法に唯一の正解があるわけではないので、個々の企業によって、それぞれの会社に適合したフレームワークを作ればよいと思います。BMRはフレームワークづくりの際の1つの参考資料になるでしょう。

今回の読書会は図書館との共催で実施しました。申し込み書の作成から受け付け事務まで全面的に図書館にご支援いただいて開催できたものです。一般の図書館利用者にもご参加いただき、オープンの活動ができました。  
チューター：朝野熙彦(葛飾図書館友の会会長、多摩大学大学院教授)

## = 10回目を迎えた『かつしか子どもの本フォーラム』開催 = 「よい絵本」複製原画展やお話、読み聞かせ、紙芝居なども 齊藤洋氏が記念講演「ルドルフ、葛飾でもイッパイアッテナ」

1月26日(土)、「かつしか子どもの本フォーラム2012一本の楽しみイッパイアッテナ」が開催されました。葛飾学校図書館ボランティア連絡会が主催し、葛飾図書館友の会も後援しているこのフォーラムは、葛飾での子どもの読書活動のすそ野を広げることを目的に2005年から開催しており、昨年は中央図書館で、今年は立石にあるウィメンズパルに会場を移し、10回目を迎えました。

同連絡会は2004年に結成され、各学校で活動している読書・図書館ボランティアの情報交換や学び場づくりや区内の学校図書館の充実に向けて活動している団体です。

今回のフォーラムは多目的ホールがメイン会場。午前の部はお話と読み聞かせ、紙芝居や大道芸などがあり、ホール前半部分に敷かれたゴザには子どもたちが座り、お母さんの膝に乗ったり、お父さんに抱かれた幼児たちが昔話を聞いたり、大型絵本を見ながら楽しんでいました。また葛飾図書館友の会会員が活動するボランティア団体によるブラックライトに照らされた紙芝居や南京玉スタシの妙技を興味深く見入っていました。

午後の部は江戸川区生まれ、葛飾で働いていたこともある“ルドルフとイッパイアッテナ”の作者、現・亜細亜大学教授の齊藤洋(さいとう・ひろし)さんを講師にまねき、「ルドルフ、葛飾でもイッパイアッテナ」という記念講演が開かれました。会場には小学生から年配の方々など幅広い“ルドルフ”シリーズの愛読者が多数参集、生い立ちや執筆のキッカケ、著作に描こうとするテーマなどについて、“大人向け”の鋭い切り口とユーモア溢れる軽妙な語り方で会場は笑いに包まれ、最後はサイン会も行われました。

ホールには区内で活動している学校ボランティアを紹介するパネルが掲示されていました。また同時に別室ではフォーラム開催時間中、第26回選定「よい絵本」の複製原画展が開かれ、中央図書館が用意したそれらの絵本も多数展示、親子が絵本を手にとって嬉しそうにページをめくっていました。



猫のピートは冬になると夏への扉を探しはじめる。そして1970年12月3日僕も夏への扉を探していた…猫から物語が始まるSF好きにはあまりにも有名なこの本。初めて読んだのは小学校3年の時、講談社の「世界の科学名作」全集で「未来への旅」という題名の子どものものだった。冷凍睡眠(コールドスリープ)で30年、そしてタイムマシンでまた1970年に過去を変えに行く。ルビをふられてはいたが、福島正実の訳は素晴らしく何度読み直したか分からない。主人公ダンは技術者で文化女中器(ハイヤードガール)という家事ロボットを作る。この文化女中器というなんともいえない訳に完全にやられてしまった。ハインラインはこの「The Door into Summer」を1956年に発表している。1970年も2000年も政治や社会、宇宙、戦争、労働環境、暮らしなどが細部にわたり現実感を持って描かれている。すっかり夢中になった小学生の私は、この全集にはまりこみ「星雲から来た少年」「赤い惑星の少年」「ロボット国ソラリス」「百万年後の世界」など当時としてはワクワクドキドキの題名の本を、おこぼかいをためて買いまくり、SFの世界に踏み込んだ。そこから創元SF文庫に進みバローズの「火星のプリンセス」の火星シリーズ、「銀河パトロール隊」から始まるレンズマンシリーズと手を広げていった。本当にたのしい読書の時間だった。

今、手元にあるのは1979年ハヤカワ文庫版の「夏への扉」。当時まだ2000年は未来だった。大人向けの文庫本で、改めてハインラインの先見性と構成力を満喫した。

そして、2013年の今、読み返してみれば、1956年のハインラインが作り出した2000年の世界は現実とはちょっと違って、そこがまたたまらない。ちょっとロリなラブストーリー、裏切る親友、悪役の美人秘書、零落した天才科学者とジンジャー・エールの好きな猫ピートと、それぞれのキャラクターもいい。私の読書の原点であり、今でもワクワクドキドキの一冊である。



(やの・きょうこ 広報委員会副委員長)

## 「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

毎月第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また従来通り友の会開催イベント時や4月の総会でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、25年度年会費をご記入下さい。

また1口500円の寄付も大歓迎です。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。

恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者(打越さん、吉村さん、清水さん、白井さん) Tel 03-3607-9201

携帯電話の電源を切った。某日、この不調になった電話器を持って修理センターに行く、買い替えを勧められた。同じ時に購入した社会人の息子の携帯電話には異常がなくて私ののは部品を換えても直らない▼その頃、身の回りで色々なことが起きていて長く使用していた大事なワープロが突然に壊れ、自宅電話も故障していた。そして携帯電話である。何かの試練とすることと収入の無い私に向かつて電話料金のかかりすぎと言う夫の言葉に精神的にまいって、思い切つて電源を止めてみた▼連絡が全然こない、あれだけあった友からの電話も無い。体調が悪くなつて常の会合にも出席できず、悪口・噂話が飛び交う気がして60才すぎた姿を鏡に映して見たり、時々般若心経を唱えながら泣いていた時もある▼ある日、ファックスが付いた自宅電話を新しく購入・・・私宛にファックスが届いた。打ち合わせの案内状である。文面のすみに、「お元氣ですか」と書いてあった。「電話が通じないけれども、どうしているの？」との連絡がいくつか自宅電話に入っていた▼で、考えたのである。たしかに携帯電話は文明の利器であるし、使い方法によっては面白い。私にとって便利ではあった。多忙の身を思い直す時期だったのか、疎外感への処方だったのか。うるさい携帯音が聞こえないので、図書館へ安心して行け、本に集中できる。生き方が少し変わり、人との付き合いも少し優しくなってきた気がします。

(栗竹広報委員)

色えんぴつ